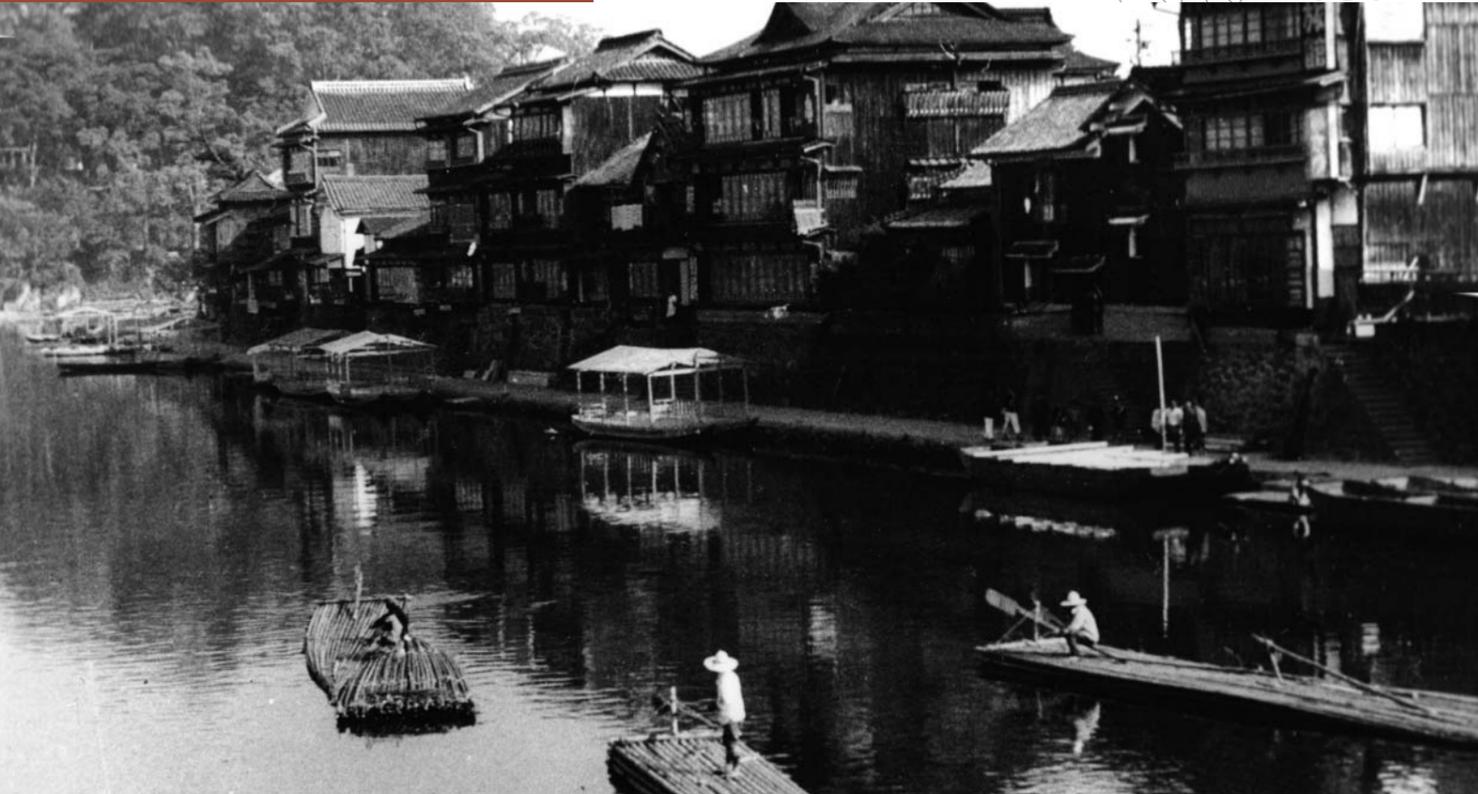


あの頃の風景

筑後川編 第2回

株式会社片平エンジニアリング/総務・契約部
佐藤 尚 SATO Takashi (会誌編集専門委員)

古き良き町並みと日本三大美林のまち「日田市」



① 筏が往来していた頃の三隈川(筑後川)

大分県北西部に位置する日田市は、阿蘇・九重山系などに囲まれた盆地にある。玖珠川・花月川など筑後川上流域の支流の多くが、この日田盆地で合流している。その筑後川は、ここでは三隈川と呼ばれ、市内で三隈川、隈川、庄手川と三つの河川に一旦分流し、再び一つの河川として合流している。このような地勢からか、ここ日田盆地では古くから幾多の水害に見舞われていたようである。近年においても、昭和28年の大洪水の被害総額が約60億円とも言われており、当時の新聞に「一切の交通網を切断された孤立の日田、豪雨による水害の惨状は目を覆う」と書かれるほどの大災害を経験している。

江戸時代の日田は九州の天領地を統括する代官所が置かれ、その代官に保護を受けた幾つかの豪商が出現する。九州の諸大名や幕府領民を相手に掛屋

という貸付業を営み、その貸付は「日田金」と呼ばれるほどで、とても栄えていた地域であった。この豪商があった町並みが日田市内の豆田町と隈町に残っている。日田市ではこの地域の歴史的町並みの保存に力を注いでおり、昭和50年代から、古い町並みを守り活かした町づくりが展開されてきた。天領祭、祇園祭の復活や天領日田のおひな祭りといった、今では有名になった多くの観光客が集まる行事が始まったのもこの頃である。また歴史的町並み保存のため、その景観の形成に寄与している伝統家屋に対しては、建物の修理・修景事業の補助などを行い、その結果、平成13年には国土交通省の都市景観賞「美しいまちなみ大賞」を受賞している。

また、日田市は日本三大美林の地としても有名である。天領地だった江戸時代から幕府の植林奨励に



②(上) 昭和6年の庄手川、玖珠方面や小国方面から切り出された木材を川に流して製材所に運んだ
③(右) 現在の同じ場所。県道が建設中であり、川の中央に橋脚が作られている



⑥(下) 明治末期の豆田町。掛屋を営む豪商の家が建ち並んでいる
⑦(右) 現在の同じ場所。町並み保存により当時と変わらない家が数多く見られる



④(上) 昭和46年の花月川。子供たちが楽しそうに川遊びをしている
⑤(左) 現在の同じ場所。上流では秋になると竹灯ろうを使った「千年あかり」が行われている。



⑧(下) 昭和初期の三隈川に架かる木橋の銭測橋
⑨(左) 現在の銭測橋。今ではプレートゲーター橋となっている



より杉の造林が盛んに行われたのが始まりで、筑後川の水運を利用して木材を流送できたことが発展した要因の一つと言われている。上流の玖珠や小国方面から切り出された木材は、この地域で筏になり河口の大川市まで運ばれていた。昔は数多くの筏師が居たそうである。当時の筏師は大川市までの移動中、飲み水を持って行かず川の水を飲んでいたという。それだけ水質が良かったのだ。しかし昭和27年、夜明ダムの完成により筏の姿は消え行くことになる。

一方、庄手川の川岸にある隈町には川に突き出た広場が残っている。これは汲場と言ひ、米を研いだり、野菜を洗ったり、この地域の人々がいかにか川と共に生活していたかが伺える。現在、汲場はここ隈町でしか見られないが、かつては至る所にあったと言われている。

今、日田市は「環境日本一を目指す日田市」として当時の町並み保存に加え、親水場所として川との関わりを大切にしている。「水郷ひた」の水郷はスイキョウと濁らずに読むそうである。名前のとおりいつまでも清らかな地域であって欲しい。

<参考文献>
1)「日田市六十年史」大分県日田市
2)「水郷日田 ～川の記憶～」日田の川原風景 写真集/作成実行委員会

<取材協力>
日田市市民環境部水郷ひたづくり推進課
日田市教育委員会文化財保護課

<写真提供>
写真① 井福豊三郎
写真② 石松巖
写真③、⑤、⑦、⑨ 筆者
写真④ 萩原祥夫
写真⑥ 有村家 所蔵
写真⑧ 小竹登紀雄